



船型が大型化する昨今、島民の生活物資輸送を船に依存する離島航路では、大型RORO船の着岸操船に支障を来す港湾が増えている。宮古島の平良港がその問題に直面していることから、井上名誉教授は平良港を現地視察し学術面から操船の安全評価を行った。その詳細が翌日の現地3紙に報じられた。

■沖繩タイムスの記事

沖縄タイムス 平成 23 年 5 月 29 日 (日) 日

井上教授が視察 後進接岸に危険性

宮古島

宮古島市平良港の運用について大型船舶の接岸が困難との指摘がある中、専門家の判断を仰ぐと、神戸大学の井上欣三名誉教授（操船論）がこのほど、入港する大型船舶の実際の接岸の様子を視察した。井上名誉教授は「いつ事故が起きてもおかしくない状態。早急に改善することが望ましい」と指摘した。



大型船の対応へ課題

平良港湾事務所と宮古島市建設部港湾課が、船舶の大型化に対応するため第2、第3埠頭を埋め立て、耐震強化岸壁とする平良港漲水地区再編計画の事業採択に向け、操船の専門家の見解を踏まえるため行った。現在、平良港では大型船舶の接岸には、最も水深の深い第2埠頭（全長約185メートル）の左側岸壁が使用されている。

しかし、船舶の荷物の揚げ降ろしを行う可動橋（ランプウェイ）は船の右側に設置されていることが一般的。

そのため平良港で入港した船舶は、第2埠頭への右舷付

視察する神戸大学の井上欣三名誉教授
(右) 宮古島市・平良港

の航行に向かないため、過去には冬場の強風時に船体がおられるなどのトラブルも発生。同港は耐震護岸ではないため、震災後は離島航路の安定的運用を求める地元から、再編計画の事業採択に対する強い要望も上がっている。

■ 宮古島平良新聞記事1



[■拡大版はコチラ](#)

[■宮古島平良新聞記事2](#)

■写真









